

わたしの問い続けてきたこと(上)

——イエスの信仰——

目次

まえがき	1
一 見えるものと見えないもの	8
二 神の支配と創造に於ける自然	18
三 律法主義と統一化現象	28
四 個人の根底に働く事実	38
五 対入関係の根底に働く事実	48
六 共同体の根底に働く事実	58
七 再び事実を見る	100
八 すべてを包む事実	115

まえがき

私たちは何処かで立ち止まって、自分が歩んで来た道を振り返ってみることは大切です。そうすることによって自分自身を整理出来ます。同時に、後の歩みの方向づけも出来ます。

ここに記したことは、これまでの私の求道の振り返りであり、その歩みの整理の作業でもありません。

青年時代に聖書に出会い、それ以後今日迄、ご縁のある方々とご一緒に求道させていただきましたが、この辺で自分の信仰態度を整え、一層豊かに求道させて頂くことが出来ればと願います。とはいえ、これは私一人のこととしてではなく、この作業がご一緒に歩む方々のためにも、少しはお役に立ち、神さまの栄光がそれによってあらわされる一助になればと思います。

人の思いは我が思いでもあり、わたしの迷い、私の疑問、私の反省と方向づけなどに、共感していただける部分が沢山あるのではないかと思います。勿論、ご批判もありませんように。とにかく、思いつくままに書いておりましたらご覧のとおりになりました。

これまでの求道のなかで出会ったお方がたくさんおいでになります。それらの方々の言語表現や思考、また研究成果などを参考にさせていただいての今日の私の語りであります。とても有

り難しいことだと感謝しています。

思いつくままに記したとは言え、その内容には順序があります。「上」におきましては、「イエスさまの信仰」ということに焦点を当てて考えました。つまりイエスさまは何を見ておられ、何処に立って、何を人々にお説きになり、お示しになったのかということですが、それは、イエスさまとはどのようなお方なのかということを考えることになります。勿論、このことについては多くの研究者がその専門の立場から、いろいろと述べておいでになるようですが、私はただ、私の信仰の態度表明として記したままであります。

イエスさまについてこのようなことを学ぶことは、結局、人間としてのわたしの立つべきところ、それは他でもなく、わたしの存在の根拠と根源とを得ることになります。つまり、イエスさまを問い習うということは、自分を問い習うということであり、自分の存在の根拠と生きる意味とを知ることになるのであります。そのような意味で、自分の信仰の態度表明、つまり信仰告白として記したものがこの冊子です。

「中」におきましては、パウロを中心にした原始キリスト教団のイエス理解に、わたしの信仰の態度表明として焦点を当てて考えてみようと思っております。それは、原始キリスト教団は、イエスをどのように理解し、そこから何を得、その結果どのように生き、人々に何を示し、語ったのか、ということでもあります。

以上のことを信仰の立場から理解することによって、両者の根底に働く「命滾る世界」を戴き、新約聖書が提示する世界の普遍性とその真実に開眼させられるなら、聖書の真理性は、ひとり「キリスト教」だけの世界のこととして、他の一切を否定することなく、名実共に宇宙的かつ根源的な真理性として、すべてを支え包む命そのものであることを信仰において了解出来ると思ひます。

もし、真理性が、他のものを否定したり、従属させたりすることによって成り立つなら、その真理性は自らの非真理性を証明したようなものです。なぜなら、真理はそれ自身の真理性をそれ自身で充足し、提示するものであつて、何かを否定したり、従属させたり、また、何かに拠り頼むことによつて自己主張するようなことではないからです。

それにしても、「キリスト教」という宗教は、その歴史の中で、その時代の国家権力を自らに包み、またそれらに包まれることによつて、自らを唯一絶対的に正しい宗教であるかのような幻想を、「教会」という巨大組織を通して、世に対して主張してきたように思われます。しかしそのような幻想は、キリスト教会が拠つて立っていた西欧世界の没落により崩れ去り、教会の存在意義が根本から問いなおされているのが今日の「キリスト教会」であろうかと思ひます。

しかし、それは、「キリスト教会」のことであつて、決して「聖書」の真理性やイエス様やパウロなどが生きて示した真理性の崩壊ではありません。それどころか、イエスが生きて示し、パ

ウロや使徒たちを生かした真理性そのものが、「キリスト教会」の在り方と信仰の独善性と排他性を裁くのであります。まさに今の時代はそのような時であると思われませんが、聖書が秘めている真理性そのものが裁くとは、ただ罰するという否定的なことからではなく、また、ただ反省を促すということではなく、教会をして本来あるべき姿へ導く創造的な神の行為なのであります。それは他でもなく、神の命の滾りたぎりによる本当の自由へと人々を導く創造行為なのであります。ここにこそ、二一世紀は希望を託す事が出来るのです。

今日、一部の熱狂的な教会集団はともかく、ここあるキリスト者は形骸化されつつある伝統的な教会の信仰態度に不安と危機感とを抱いているようであります。

ここに記しましたことは、理屈のことではありません。ましてや神学的な展開や主張ではありません。申すまでもなく、私にはそのような専門的な知識や能力などありません。私がここで記していることは、聖書を通してイエスに出会い、多くの使徒達の信仰告白に接し、その信仰の命に生かされ、生きてきたひとりの信仰人として、聖書が提示する真理性が人間本来の在り方において極めて自然なことであり、その真理性はすべての根源にも命として躍動しているということであります。決して、「キリスト教」だけが、その真理を持っており、他の一切のところには真理性が欠落しているというようなものではないということであります。このような真理把握が聖書に於いて出来るということとは、まさに、聖書が示す真理性の確認にこそなれ、キリスト教に

とつて忌むべき事ではないのであります。

私は今日までの聖書を通しての求道に於いて、以上のような思いをますます強く持つようになっていきます。そのことの証言として「わたしの問い続けてきたこと」と題して記したのであります。

このような告白が、それを聞いていただく方々の求道生活を、少しでも豊かにする機縁となればまことに幸いであります。

尚、「上」に続いて「中」の部分が只今も、「みちしるべ」で毎月記されつつあり、それが終了した段階で纏めて「みちしるべ文庫」におさめられる予定です。

この「上」は、教友の山本哲也氏が手作りで纏め、一冊にしてくださいと、それを「みちしるべ文庫」に加えました。感謝いたします。

一九九三年九月十日

松下 昌義

第三版のまえがき

この第三版は、先の第一版の内容に手を加えず再販しました。本書の文章が「みちしるべ誌」に連載が開始され完了したのが一九九三年八月であります。その二年後にオウム真理教という宗教集団が「地下鉄サリン事件」を起こし、その梟悪きょうあくな犯行に日本のみならず世界の人々に衝撃を与えました。この事件は多くの人々に「宗教」に対する不安と不信を一層いだけさせてしまったのはまことに残念なことであります。

しかし、この事件をカルト的一宗教集団、または宗教一般の問題としてとらえるのではなく「統一化現象」が生み出した問題として考えることが大切なことだとおもいます。統一化現象とは宗教に限らず、ある一つの書物や主義や主張または教義等を神格化するあらゆる分野に於いて生ずる、一種の狂気であり、悲劇なのであります。結局、人間にとって、この「統一化現象」をどのように克服するかということが大きな問題であるといえます。

イエス・キリストを見つめていますと、この問題に対する解答も得られ、さらに人間の幸いな生き方に必要欠くべからず宗教の在り方の根本をも提示されていることに気づかされます。本書がその意味で、お読み下さる方々に少しでも益となり、イエス・キリストの存在意義を正

しく理解していただく助けになるなら幸いです。

尚、全面的にワープロしなおしてください。くださった教友、小野恵子氏の熱心なご奉仕がなければ、第三版の本書は生まれませんでした。ここに氏に深く感謝申し上げます。

一九九八年七月十日

松 下 昌 義

一 見えるものと見えないもの

「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり見えないものは永遠に存続するのである。」（第二コリント四・一八）

これは使徒パウロが信仰人として自分の生き方を語った言葉である。たしかに、見えるものはすべて一時的であり、何時までも存続することは出来ない。形あるものはいつかは崩れるといわれるのも同じである。それゆえに、見えるものを自分の生きる拠り所としてみると、必ず失望する。

×

×

だが、わたしたちは見えるものの世界に生きている。そしてわたしたち自身も見えるものの一つである。見えるものが一時的であり、いつかはなくなると分かっているけれども、見えるものにより頼むしか生きようがないのが、私達の現実であり日常である。分かっているけれども、それしか生きようがないと思っている。しかし、はたして、それしか生きようがないのだろうか。先の使徒パウロは、「見えないものに目を注ぐ」生き方を神を仰ぐ信仰によって見出した。

「見えるものに目を注ぐ」生き方について少し考えておこう。

見えるものとは、歴史的時間的な形態で現れているものことである。地球もその一つであり、国家もその一つである。およそ私達が見て触れて聞いて嗅いで知ることができるとしての事柄もその一つである。さらに、人間関係や社会関係において生じる権力とか富とか愛とか信念とかその他すべて人間が生み出す学問や芸術や科学や宗教などの文化現象のすべても「見えるもの」の一つである。

これを一口に言えば「この世」にあるものすべてが「見えるもの」なのである。そして、私達もこの世に在るものとして「見えるもの」であることは先にも言ったとおりである。

それにしても、「見えるもの」とは「見るもの」でもある。特に私達人間は「見えるもの」であると同時に積極的に「見るもの」として生きている。

積極的に見るものとは、見えるものを自分の内に積極的に取り込むことによって、自分を拡大させ、それによって自分自身の存在を確かめ、安心を得ようとする態度のことである。その意味で、私達は「見えるものに目を注いで」生きているものである。これを別な言葉で言えば、この世の内部で出会われるもの、または、この世の内部で結ばれる関係に、自分の生き甲斐を求めて生きているものが私達である。

×

×

この世の内部の何かと関係を結び、それを自分の人生の生き甲斐となし、拠り所または支えとなすことを「偶像化する」という。

「見えるもの」とはやがて消えて無くなるもの。言うならば、見えるものとは果敢なきものである。これは見えるものに対する神の大決定である。それゆえに、見るものとしての自覚を持つ人間は何時も不安を、存在の根源に背負って生きている。そのような自分の不安を克服するためには積極的に「見るもの」となり、見えるものの中に自分の存在の支えとなるようなものを求め、そこで安心を得ようとする。かくして、この世の何かを「偶像」とする。ある人は富を、ある人は権力を、ある人は偉大と信じる主義を、ある人は自分のために神をたてる、このようにしてそれぞれを「偶像化」する。それらにしがみ付き、それらを支えとして自分の人生を救おうとする。

以上のことを一口で言えば、「見えるものに目を注ぐ」ばかりの生き方をするならば、何かを「偶像」とすることに於いて極まることになり、その結果は絶望で人生を終わることになる。なぜなら、偶像は決して最後の支えにはならず、崩れ去るからである。

だが、人が、見えるものの中で最後の支えとして捨てることなく固守しているものがある。それは自分自身である。すべて見えるものに絶望しても、即ち一切の他律に失望しても、自分自身に依り頼む自律的な生き方があると思う。「すべては信じられないが自分自身は信じられる」

と思う。しかし、誰でも直ぐに、当の自分自身が如何に不安定なものであるかに気付くことになる。なぜならば、自分自身も「見えるもの」だからである。すべて「見えるもの」はそれ自体一時的なものだからである。

だからイエスは、きつぱりと言われた。「肉は何の役にもたたない」と。それは、見えるもの（肉）は人を本当に生かす命にはならないということである。（ヨハネ福音書六章六三節）

×

×

使徒パウロは、「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」と言ったが、では彼が目を注ぐ「見えないもの」とは何なのだろうか。これについては先のイエスの言葉が教えている。即ち「命を与えるのは霊である。肉は何の役にもたたない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」と。

この「霊」こそ「見えないもの」なのである。では「霊」とは一体何なのだろうか。それは、ものをそのものたらしめているそのもの、であるといえる。別な言い方をするなら、すべてのものに及ぶ神の働きそのものであるといえよう。

×

×

すべての「見えるものがある」ということは、見えているもの自身によるのではない。そうではなくて、見えているものに先立ってすでに在る働きそのものが、見えているものを生み出し、

支え、それたらしめているのである。それを「靈」と言い、また「神」と呼ぶのである。否、そのような言葉自体も決して当の「それ」ではなく、言わば「靈」とか「神」とか呼ぶよりほかなき「それ」なのである。それゆえに、旧約聖書の十戒には、「神の名をみだりに唱えてはならない」と示し、また、「いかなる像も造ってはならない」とある。まさにそのとおりであつて、見えない当の「それ」は「みだりに唱えられない」のである。また「いかなる像にもすることが出来ない」のである。

人が認めても認めなくても、すでに一切に先立つて在る見えない「それ」が人を人たらしめている。その働きこそ靈の働きそのものである。しかし多くの人は、それに気づくことなく生きている。そこに人間の悲惨と罪とがある。しかし、その悲惨であることも罪あることも「見えないそれ」が許し支えている。その意味で、人は「見えないそれ」即ち神又は靈の働きから一歩たりとも出ること出来ないのである。そのような存在が「見みえるもの」の本当の姿なのである。このような存在者の現実存在を「神ともいます」即ち「インマヌエルの事実」とカール・バルトに学んだ滝沢克己氏は理解し其感するのだが、私はその事実を「創造に於ける自然」と言つてきた。これこそ正に神の恩寵または神の一方的な恵みそのものにほかならない。

以上において「見えるもの」と「見えないもの」とについて大まかに述べてきたが、イエス・キリストの存在についても例外ではない。即ち、イエス・キリストも「見えるもの」なのである。こここのところをしっかりと確認しておくことは大切なことである。聖書はイエスの誕生の次第を語り、その生涯を示している。つまり、イエスは聖書が示すように、あの時、あの処に生まれ死んだ、まぎれもない歴史的な対象であり、起源をもつひとりの人である。その意味では私達と異なる存在ではない。にも関わらず、私達と絶対に異なるところがある。

私たちはともすると、イエスの勝れた道徳的な品性とか、人々に与えた力強い感化とか、その宗教的な体験の深さなどさらに、後世の人々に残した影響力の偉大さなどに、イエスと私達との異なるところを求めようとするが、これらは、イエスに於いては本質的な事柄ではない。それらは、所詮はこの世の見える世界の内に起こったできごとにしかならない。それらの出来事が如何に偉大で勝れていようと、決してイエス・キリストに於いて示される本質的なことがらでは全くない。イエス・キリストに於いて示されたことは、人が認めても認めなくても、また、人が好むと好まないとに関わらず、すでに、すべてをそれたらしめている神の恵みとしての関わりとその働き、即ち「見えないそれ」または霊の働きと関わりと支えに、素直に応答しその命をそのままに生きたこと、即ち、「創造に於ける人間の自然」を生き、そしてそれを示し語ったそこにこそ、イエス・キリストのキリストたる本質がある。

この一点を決して見誤ることなく見てとる、ということとはとても大切なことである。それゆえに、もう少し語ることにする。

×

×

少しだけ表現が複雑になるように思われるが、このところはキリスト教理解だけに止まらず、私達が「見えるもの」の世界で、幸いに生きて行く為の深い智慧となること gara でもあるので、是非とも御一緒していただきたい。

×

×

ここで、私達がしっかりと目を向けなくてはならないことは、イエスは、見えるものすべての根底に働いており、それをそれたらしめ、支えている「見えないそれ」即ち霊または神の働きとよばれるそれとの関わりを、素直に生きたということである。それはとりもなおさず、イエスに於いて初めて「見えないそれ」が私達の内に生じたということではなく、すでに在るそれを、在るとイエスが示したのであつて、決してイエスによることなしに、それが在りえない、ということではない。

たしかに、わたしたちは、イエスによることなく、また聖書によることなく、さらに聖霊の働きによることなく「それ」に目覚めることは出来ない。だが、それは「見えるもの」の世界のことであつて、「見えるもの」の根底に働く「それ」は、いつでも、どこでも関わり続け、支え統

けて現在のこととして在るのである。けつして、イエスにおいて初めて生じたのではない。つまり、イエスにおいて初めて神との関係が成立したのではない。

×

×

イエスに於いてだけ、「見えないそれ」が現され、そこでのみ、また、イエスを通してのみ、「それ」との関係、つまり神との関わりを得るとするならば、すなわち、そのことを信じるキリスト教以外の教えはすべて誤りの教えということになる。そして、さらに、誤りの教えは非真理として悪の烙印を押され、撲滅しなくてはならない対象となる。

この問題は今日、日本のキリスト者が密かに抱いている不安であるように思われる。勿論、そのような不安を抱くようなキリスト者は、聖書の福音信仰を正しく理解していない不信仰の者どもであるとするキリスト者もいる。しかし、それらの人々も含めて、キリスト理解において、一体問題とすべきところが真にどこにあるのかということが、明確にされないままなのである。

この問題は、ほかでもなく私自身が信仰人として生きるのつびきならない問題でもあった。このところを私なりに明確にしなくては、一歩も前に進むことが出来ない問題であった。キリスト教の教義の問題ではない。神学上の問題などではない。私の生きることに直接関わる問題だったのである。私は、なりふりかまわずこの問題と取り組まざるをえなかった。そうしないと、わたしは生きてはいけなかったのである。すべての面で疎く劣っている私の遅々とした歩みの故に

二〇年以上の時間が過ぎてしまった。

×

×

イエスは「見えるもの」として私達の間存在された。しかしその存在の仕方は「見えないもの」に生かされ支えられる、言わば神と人との根源的な関係をそのまま反映するものとして自覚的且つ決断的に生きられたのである。その意味ではイエスは真の神であると同時に真の人として生きられた。だが、このイエスに於いてのみ神が、つまり「見えないもの」が啓示され、人と神との関係が初めて成り立ったとするのが今日のキリスト教の教えるところである。そのような信仰の故に、イエスに於いて以外に「見えるもの」と「見えないもの」との関係、つまり神と人との関係は成り立たない、つまり神による救いはないことになる。その結果、イエスのみが絶対の救い主キリストとなり、イエスという「見えるもの」が「見えないもの」に吸収されてしまい、一種の偶像のようなものになってしまう危険を孕むことになってしまった。事実、キリスト教徒は、イエスを即キリスト（神の子・救い主）とし、イエスを信仰の対象とすることにより、あたかも偶像を拜む者であるかのような感じの者、又はパリサイ的な排他的独善者のようになってしまった。

×

×

私は今、イエスをキリストではないなどと言っているのではない。わたしにとってイエスはか

けがえないキリストである。イエスは正しく神の子である。わたしの信仰的な生まからイエス・キリストは決して離れはしないし、事実離れることはない。それゆえにこそ、イエスについて明確めいにしておかなければならないのである。

イエスは「見えるもの」として存在した。その「見えるもの」はどのような場合においても決して、「見えるもの」自体で存在出来るのではなく、そこにはすでに「見えないもの」との関わりにおいてこそ「見えるもの」は在ることが出来るのである。だから「見えるもの」は必ず「見えないもの」を表現反映すべく在らしめられ、そのことを本質的な使命として在る。それが「見えるもの」の本当の存在理由であり、且つ、存在者がもつ秘儀なのである。

二 神の支配と創造に於ける自然

イエスがその生涯を通して示されたこと、語られたことは「神の支配」ということである。神の支配とは「神の国」または「天国」と新約聖書の福音書で訳されているが、天とは神のことであり、国とは支配のことである。「国」と言うと言場的な感じで理解しがちだが、むしろそれは「王として支配し治める」ことである。そして、それは、未来に成るもの、地上を越えた天に在るものというだけでなく、何時でも何処に於いても、また人が認めても認めなくても、すべてをすべてたらしめている一方的な神の恵みの働きそのものことである。

したがって、イエスがその生涯を通じて示された「神の支配」とは、見えるものも見えないものすべてを含めて、創造し、保持し、完成する根源的な命の働きそのものである。謂うなれば、「有る」ということもその命によるのであり、「無い」ということもその命によるという「それ」がとりもなおさず「神の支配」なのである。

それだからこそ、イエスは「神の支配がもう来ている」という言葉を人々に示すことによつて伝道を開始された。しかも、この神の支配が人々の元にもう来ているという現実こそ「福音」なのであると、イエスの福音理解をマルコ福音書は示している。(マルコ福音書

イエスにとって「神の支配」とは、見えるものも見えないものも、また永遠の過去も永遠の未来も、それとして在らしめている根源的な命の働きの「事実」なのであって、観念的で幻想的主観的な思いといったようなものでは決してない。

「神の支配」の「事実」は自我を超えている。したがって、自我のレベルではこの「事実」は決して見ることも知ることも出来ない。

自我とは、どこまでも自分を保存し拡大しようとする働きをするものであり、自分は自分によって自分であると信じている自分のことである。

また、自我はいつも自分以外の他者から自分を区別することによって、自分は自分なのだ意識している主体である。このような自我のもとで、そのような自分が自分のすべてなのだと思いつ込んで、私達は生活している。しかし、私達の本当の現実はそのようではない。自我は自我を超えた命の働きによって支えられているのだ。自我の底に自我を超えた命の働きが厳として躍動している。これこそ私という人格を本当に生かしているものであり、且つ生かす「事実」である。正にそこにこそ私達の生きている本当の現実がある。この現実こそ「神の支配」にほかならない。イエスはそれを知っておられ、見ておいでになった。だから次のように示された。

「わたしは、知っていることを語り、見たことを証ししている」のだと。そして、「神の支配は『ここにある』『あすこにある』と言えるものではない。実に、神の支配はあなたがたの内に³ある」と言われる。さらに、それを「空の鳥をよく見なさい」「野の花をよくよく見なさい」と見えるものを具体的に示しながら、その根底に在ってそれをそれたらしめている根源的な命のいとなみの事実を確かに知ることを促される。イエスは「それ」を確かに見て、知っておられ「それ」を自分で生きている。

イエスにとって「神の支配」は現実そのものであつてそれ以外に現実はない。この一点に人が開眼するとき、今まで現実だと決して疑うことがなかったものの非現実性が明らかとなり、真の現実のなんたるかを知ると同時に本当の自分が立つべき処に立つようになる。そのとき人は自らの存在理由と生きる意味を知る。そして全き自由人となり救済される。

イエスはこの時の人の姿を次のように言った。

「わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満ちあふれる」と。(ヨハネ福音一五章一節)

×

×

人は「無神論」か「有神論」かと議論することがある。また「キリスト教」か「仏教」かとの立場の是非を巡って論議する。さらに「科学」か「宗教」かとの是非を語る。そして「あの

世」があるのか「この世」だけなのかと私達は思いをめぐらす。

だが、イエスにとつてはそれらの事柄は全く問題にはならない。そのような人間自我の処で宗教を論じたり神を語ったり、又は真理性を問うてゐるのではない。イエスは先にも述べたごとくすべての事柄の窺極の支点、または根源として、それをそれたらしいめてゐる命の働き、即ち神の支配そのものに目を向け見て、握むことを促される。そのところでは有神論も無神論もキリスト教も仏教も、その他一切、人が自我の思いに執着してその正否を論じることが、およそイエスに於いては閑人の戯言になる。

だから「自分の命のことで何を食べようか何を着ようかと思ひ悩むな」とイエスは語り、最後に「何よりもまず、神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これのらものはみな加えて与えられる」と示された。(マタイ六・三三)

×

×

すべてのものはそれ自身でそれではなく、それ自身を越えた「それ」によつて、それはそれであり得るのである。「それ」は初めから今も、そしていつまでもそれと共にあり、それがそれであり得ようとする以前にそれをそれとして立たしめてゐる命のいとなみそのもの、「それ」をイエスは「神の支配」と言った。

生きようとすること、そして、よく生きようとすることに關わる一切の人間の営みへの願い、

その中には勿論宗教への信仰と求道の願ひも含まれているが、それら一初の願ひが人に生じてくるのは、人が生の根底に於いて「神の支配」のもとに在らしめられているからである。故に、人間に於ける宗教的な生は、個人の側から自らの求めに於いて生ずる「私事」ではない。すべての者が自らの思いに先立って、すでに「よく生きたい」という根源的な命の営みのもとに置かれている故に、宗教的な生が生まれてくるのである。つまり人が自分の宗教を選択する以前に、すべての人はすでに宗教的な存在なのである。それだけではなく、全宇宙の営みそのものが窺極に於いて「神の支配」のもとにある限り、全宇宙と全時間とはそのまま宗教的なものである。

このような実存の姿を「初めに、神は天地を創造された」と旧約聖書は冒頭で示したのである。それ故に、人間にとって宗教は「特定の宗教」が問う（それが哲学的であろうが、神学的であろうが）真理性についての一つの問いとして初めて存在するのではなく、深く存在の、根源の事実に関わる窺極的なこととして自ずから生ずる問いであり、同時に既に答えとして存在しているのである。謂うならば、宗教の問題と答えとは既に人の命の芯しんに深く食い込んでいるのである。それ故に誰もその問いと答えとを無視して生きることは出来ない。だからこそイエスは「神の支配は実に、あなたがたの内にあり」と示されたのである。

にも拘わらず、人が宗教の問題を特定の信仰としてとらえたり、歴史的な形態としての一つの宗教をそれ自身唯一絶対の真理として受け入れたり主張したりするならば、たちまち、宗教は独

善となり、排他的戰鬪的、さらに自己満足的熱狂主義となつて、世にも醜惡な姿を呈するにいたり、宗教をしてこの世の一つの生き方、または真理について一つの教義または理解や主張するものとして自らを限定矮小化してしまうことになる。これは今日の宗教を見るなら明白である。そして「キリスト教」もそのような所謂「宗教」となることによつて、イエスが「神の支配」を示したその人間実存の根源の次元で神を問ひ、且つ人間と世界の在り方を問うたところから脱落してしまつたと言うのは全く間違つたことだろうか。

×

×

イエスは、「神の支配」を語り、示し、行ずる者として生きた。それはただひたすら、すべての存在の窺極の基盤そのものを生きることによつて、基盤そのものをして語らしめたのである。このようなイエスの生きざまに接した人々は、イエスについて「学者のごとくでなく權威ある者のようだ」と言つた。それは、誰か、または何かの權威によつて自分の權威を保証しようとする学者（モーセの權威に依存することによつて—それはモーセの律法—神の權威とした律法学者）の一つではなく、それ自身が人々に、存在の基盤にある自然な在り方として承認と服従とを要求する自然律的な支配のことを「權威」と言つたのである。つまり、人間存在の基盤、または根原において、誰にとつても自然な在り様を、イエスに接した人々は素直に共感したのである。

それ故に、イエスが示し、語り、自ら生きたその在り方はひとり「キリスト教」の枠内に止ま

らず、すべての人間、すべての存在そのものの当然の在り方、自然な在り方、そう在ることによつてのみ安心と平安、幸福と喜び、希望と力、救いと永遠とを得られる命の在り方なのである。そして、そのように気づくなら、イエスが生きて示した「神の支配」に生きる人間の実存的な在り様は「創造に於ける自然」なのだといえる。

×

×

「あなたの頭にかけて誓ってはならない。頭の毛一本すらあなたは白くも黒くも出来ないからである。あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは悪い者から出るのである」と、イエスは示された。(マタイ五・三六)

私達の思いから絶対に独立した現実がある。これが「神の支配」である。その現実私達の元に私達自身よりも最も近くにある現実でもある。このような「神の支配」こそ「然り、然り」「否、否」の世界である。

私にとつて私自身が最初であり、最後なのではない。私は、私自身の「頭の毛一本すら白くも黒くも出来ない」私なのである。勿論、私の生も死も私自身どうすることも出来ない。しかし、それは私にとつて悲惨な事柄では決してない。寧ろ限り無く有り難きことなのだ。もし、私の存在がすべて私自身にかかっているなら、私達はこれほど悲惨なことではない。なぜなら、私は私自身の存在に根源的に何もすることが出来ない存在だからである。

私のすべては「神の支配」に根源的に依存している。そこに生ずる「然り」が私の「然り」となり、そこで生ずる「否」が私の「否」となる。そして、それはそのまま平安と喜びの命に輝いているのである。なぜなら、そこでの「然り」はすべての存在に関わる神の命による営みそのものの「然り」であり「否」なのだから。

「誓う」という態度は、自分で自分の存在に責任を持つとする表明である。謂うならば、「誓う」という行為こそ、自分を自分で支えられるとする自我の姿そのものである。

しかし、人は決して自分で自分の存在に責任は取れない。人はいかなる意味に於いても自分自身で存在していないからである。人の命はすべて神に始まり神に終わる。つまり、すべて神の然りと否とにあり、そのままですべてが神の輝きであり現れそのものなのだ。

人はすべて神の命の時が到って生まれ、神の命の時が来てこの世を去る。すべてが神の命の有り難き輝きにほかならない。

だが、人は神の「然り」と「否」とに生きてはいない。いつも自我が自分に促す自己中心的な欲と知恵が生み出す自我による然り、自我による否とに生きて、自らの手で自分を虚無の中へと落としてしまっている。それゆえにこそイエスは「一切誓ってはならない」と言われる。自我が拡大され強化されればされるほど、人格は破壊され、虚無がその内に増大することを私達は忘れてはならない。それ故に、自我を基盤とした道徳も倫理も哲学も宗教も科学も、さらに政治的努力も決

して人を救うことは出来ない。

だからこそ、神の然りと否「それ以上は悪い者から来る」とイエスは指摘されたのである。

(マタイ福音書五章三七節)

イエスは「神の支配」を生きたることによって人々にそれを示した。それはとりもなおさず、神の「然り」と「否」とをそのままに生きたのである。つまり、ゴルゴタの十字架に到るイエスの一生は「創造に於ける人間の自然」としての神に在る実存を、そのまま神を命としつつ、同時に自らの決断において神そのものを生きたのである。その意味で、イエスはまことの神にしてまことの人であつたと言える。

×

×

すべてのもの、人の根底に神の支配は及んでいる。神の愛と力が漏れなくあらゆる時、処、人に無条件で溢れるばかりに降り注がれている。だからこそ人はそれを失うか得るかということが問われるのである。

イエスは、すでに及ぶ神の支配をそのまま自己の命とし、その命に促されつつ同時に自己決定しつつ、神の支配の事実を人々に示したのである。

真に人格を生かすものは何か。自我ではない。真に人格を生かすもの、それは「神の支配」である。人格を本来性へと促し生かす働きをするものこそ「神の支配」である。

イエスは「神の支配」を知っており、見ており、自覚しておられた。自らの人格として「神の支配」を歴史的現実のただ中で生きられ、示された。十字架も復活もそのしるしにほかならない。「神の支配」は自我をふりかざす者にとつては決して見えない。しかし、神の支配に自分を向けるとき、「神の支配」そのものの働きが、その者の内で、神の支配を現あらわにさせるのである。だからイエスは言われた。「こころの貧しい人々は幸いである。神の支配はその人達のものである」と。(マタイ五・三)

最後に、次のイエスの言葉に耳をかたむけよう。

「神の支配は次のようなものである。人が地に種を蒔いて夜昼、寝起きしていろいろうちに、種は芽を出して成長するが、その人は知らない。地はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すると、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである」(マルコ福音書四章二六節)

三 律法主義と統一化現象

イエスを見つめるということは、ただ「イエス」を理解するということではない。また、「キリスト教」を知るということでもない。イエスを見つめてみると、人間が見えてくる。また、神が見えてくる。さらに、世界が見えてくるし宇宙も見えてくる。従って、人間がどのような在ることが善いのかということが見えてくる。それはとりもなおさず、わたしの在るべき姿が見えてくることになる。

イエスを見つめることを、ただ「キリスト教」という一つの宗教、又は「キリスト教信仰」のことだけとするならば、それは正しくイエスを見つめたことにはならない。

「イエス」はただ「キリスト教会内」のことではなく、すべての人間のことであり、地球のこと、宇宙のことでもある。

×

×

新約聖書ヨハネ福音書に次のような話が記されている。

イエスはオリブ山へ行かれた。朝早く、再び神殿の境内に入られると民衆が皆、御自分のところにやって来たので、坐って教え始められた。そこへ、律法学者たちやパリサイ派の人々が、姦

淫の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦淫をしている時に捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところであなたはどうか考えになりますか」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなた達の中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまった、イエスひとり、真ん中にいた女が残った。イエスは身を起こして言われた。「婦人よ、あの人達はどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか」女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい、これからは、もう罪を犯してはならない」

(ヨハネ福音書八章一節)

×

×

一般に「姦淫の女の物語」と言われているこのテキストについては、古い聖書写本にはなく、「後期のギリシャ語写本や中世の写本によく見られる」ということでイエスにかかわる物語ではないのかと疑われているようだが、しかし、この物語に生きているイエスの姿は、他のテキストにまして最もイエスらしい言動をなさっておられるように思うので、このテキストに

よってイエスを語ることはふさわしいことだと思ひ、あえて採りあげた。

×

×

この出来事を正しく理解するためには「モーセの律法」がどのようなものなのかということを知っておくことが必要である。

詳しいことはともかく、「モーセの律法」は、人々の生活全般を規定する倫理的な律法であり、誰も「何故なのか」と問うことは許されない絶対的な神の定めとして受け取られていた。その意味で近代における「法律」という概念で「律法」を理解してはならない。なぜならば、近代における「法律」は人間の合意によって定めることを建前としているが、ここでいう「律法」とは神が一方的に人との契約によって与えた絶対的な定めとして存在するのである。だから、そこでは「何故のですか」という問いは成り立たない。否、そのように問うことは許されず、ただ、人はその神が与えるために服従するかしないかということであり、服従することが神に対して義を全うすることであり、服従しないことは神に対して罪を犯すことであつた。パリサイ派や律法学者は他の誰よりも真剣に律法に生きた。だから、律法に生きない者を「地の民」つまり罪人として蔑む厳格な律法主義者だったのである。

くだいようだが、このところはよくよく注意深く聞き取る必要がある。つまり、ここで言う義とは、その内容が正しいか正しくないかという判断によるものではなく、その内容がどのよう

であれ、律法の定め（それは文字）を守ることで義であり、守らないことが罪とされたのである。言わば、そこにはどのような感情も入る余地はなく、極めて事務的機械的な作業として適用されたのである。

だから次のように言うことができる。ある製品が工場で生産される時、その工場が定める規格基準に適合していればその製品は合格、適合していなければ不合格とされるのと同じなのである。パリサイ派の者たちは「モーセの律法」をそのように理解し、自ら受容することによって、神の前にも、人の前にも義人として自分を立てようとしたのである。このような生き方を「律法主義」というのだが、それを厳密に言うとき、「律法主義は律法を尊重することではなく、書かれた文字としての律法を人間の、志向と行動との究極の根拠とすること」なのだと言える。

しかし、このような律法主義に欠けていることは、「律法が何処から発して、何処へ人を導こうとしているのかを知らないまま、ただ文字としての律法を人間が生きる前提または根源としていることである。」

少し表現が堅くなってしまうが、以上のようなパリサイ派の人々の「モーセの律法」理解を知ったうえで、姦淫の場で捕えられた女の出来事に、ご一緒に注意深く目をむけてみよう。

×

×

この出来事に於いて三つの事が起こっている。一つには「没個人」ということであり、二つには「没隣人」である。そして三つ目には「没社会」である。

この場合の「没」とは無くなるということである。つまり個人が没し、隣人が没し、社会が没してしまふということは、人間が無くなるということである。人間としての私達の在り様、つまり人間の実存の形は個人的存在、対人的存在、そして共同体的な存在という形をとっているが、そのような存在がなくなるならば、もはや、人間として私達は社会的に存在出来なくなる。

人間としての私達の安定した存在の形は、個人の安心と対人間関係の安定、つまり愛がそこに働き、その結果、自ずから然らしめられる共同体の形成によるのであって、そのどの一つが欠けても、人間の本当の幸福は得られない。しかるに、ここではものの見事にすべては覆されているではないか。

神をことあるごとに口にするパリサイ派の宗教人が、姦淫の場で捕まえた女を、イエスの処へ引きずり出すことが出来たのは一体何によつたのだろうか。それは、モーセの律法による。「人の妻と姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者は姦淫した男も女も共に必ず死刑に処せられる」また「男が人妻と寝ているところを見つげられたならば、女と寝た男もその女も共に殺さなければならぬ」（レビ記二〇章一〇節、申命記二二章二二節）彼らにとつて女を逮捕すること、そして石打ちの刑で処刑することはなんの不思議もない。それは、あたかも次のように計算する

ことと同じになる。律法違反をした女は罪である。律法はこのような女を殺せと記してある。だから殺すことは神の命令に服従することであり、それは神の義を全うすることとなる。

これは極めて合理的な計算であり、計測的行為である。このような行為を正当化させるのは、昔かれた文字としての律法を自分達の志向と行動の究極の根拠とする律法主義にある。かれらは、そうすることが律法を尊重することだと思ひ込んでいる。

このような律法主義で覆われたその状況を、よくよく注意して見るとき、当のパリサイ人も女もそこには居ない。あるのは、律法という文字と律法違反という現象だけである。律法を「義」とするなら、律法違反は「罪」である。とするとそこにあるのは、ただの文字としての「義文」と、義文に適合しないということによって、機械的に弾きだされる「罪」だけである。

ここでは最早、女は女ではなく、律法という規格に適合しない物として処理されている。一方、パリサイ人も自ら律法という規格の中に消えて無くなっている。

個人が規格に化け、不良品という物に化けてしまっている。「没個人」という大変なことがここに生じている。

さらに、このように双方の人格が消えて無くなった状況に於いては、最早人格関係は生じない。目の前に居る女は人格を持った隣人ではなく、律法の文字による規格に適合しない不良品なのである。まさに「没隣人」である。

このようにして、個人が無くなり、隣人が物と化するとき、そこには人格共同体としての社会は成り立たなくなってしまう。これを「没共同体」という。

このような現象を生ぜしめるそれを、わたくしは「統一化現象」とよんできた。その意味は、一つの事柄を絶対的な根拠となし、それによって自分も他人も一つに縛りあげて統一化しようとすることを最高善とするからである。

×

×

このような「統一化現象」が最も顕著に現れるのは、所謂「宗教」に於いてであり、次に「政治的イデオロギー」に於いてである。勿論その他すべての分野でも起こる。

個人や民族や歴史的な出来事を神格化し、それによってすべてを統一化しようとする。

ある一つの書物や主義や主張、または教義を神格化し、それに盲目的に服従し依存することによって統一化しようとする。

閉鎖的な自分達だけの世界を作り、健全な情報を一方的に排除し、独善においてすべてを統一化すること。

自分達だけが正統と思ひ込み、異端を作り、悪魔を作り、汚れを作ることによって統一化しようとする。

観念が現実に優先し、その観念的な産物を現実だと思ひ込み、それによってすべての存在を規

定し統一化すること。

要するに、自分自身を含めたこの世の何かを神格化し、それを絶対的価値の尺度となし、すべてを判断し、それによつて統一しようとするところこそ統一化現象なのである。

×

×

先のパリサイ人や律法学者らは、律法の文字を神格化し、それで女も自分自身をも縛つてしまふことにより、自分も女も見失つてしまった。だからこそ、平気で女を捕らえ、イエスの処へ引つ立てて来て石で打ち殺そうとする。これは残虐行為であり、狂気である。だが、時として、一つの政治的イデオロギーや宗教的信条によつて統一化された者達が、正義や神の名によつて残虐非道な狂気を、最も崇高な行為と思ひ込み、平然と犯して来た事実を私達は、過去の歴史に多く見出すし、現代のこととして今も私達の目の前の此処彼処で起こっている。

×

×

この愚かを、イエスの前で律法学者やパリサイ人らは、律法の文字を神格化することによつて正々堂々と犯した。

しかし、イエスはその愚かさの根源がどこにあるかをよく知っておられた。

イエスは律法を批判したのではなく、律法主義の誤りを指摘されたのである。何故ならば、律法主義こそ没個人、没隣人、没社会をもたらず統一化現象そのものだからである。

そして今、律法学者とパリサイ派の人々と一人の女とを前にして、イエスは、恐るべき統一化現象から、彼等を救済しようとされる。しかし、イエスは決して批判したり、攻撃したりすることによってではなく、その者自身に気づかせることによって、その者を救おうとなされる。

× × ×
「あなあなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げつけなさい」というイエスの言葉は、彼等に大きな衝撃を与えた。しかし、このイエスの言葉を、「お前だって、罪を犯しているではないか。だのに、この女を罪に定める資格が自分にあるかどうかよくよく考えてみなさい」などというふう理解してはならない。そうではなくて、イエスの言葉は、律法の文字に記されてあるとおりに生きることによつて自分が自分として正しく保持出来ると考えている自分、それを自我というのだが、そのような自分というものは本当はないのであり、自分を支え生かしている根拠は、律法ではなく、律法を越えた命の営みそのものが、自分を生かしているのだという自分の本当の生の事実への促し^{うなが}であり、誘い^{うなが}だったのである。

× × ×
このことを簡単に言えば、「俺達は生かされている者だ。自分の目の前にいる女も生かされている者なのだ」という事実への開眼の求めであり、自我の向こう側にまどろんでいた内なる霊的覚醒への促し^{うなが}である。

律法主義とは、律法を尊重することではなく、書かれた律法を自分の生きることの究極の根拠とする態度である。それは、「律法が何処から發して何処へ人を導こうとしているのか」ということには全く気づかないままに、律法の文字にしがみつき、自他を統一しようとするのである。しかし、律法は、人間に働く創造に於ける定めが、社会でとる外的な形であつて、決して律法が人間存在の根源ではない。すべてを支え生かしているのは、自我の配慮を超えた神の支配そのものである。この事実気づかされた彼等は、自ら一人また一人と女とイエスの前から去つて行つた。そして、女自身も自分の生の根底に働く神による命の定めに見覚めたのである。だからこそ、イエスは女に何も言う必要がなかつた。

結局、自我は生の営みのどの分野に於いても統一化を為そうとして、混乱と争いととの元凶となる。しかし人はそれに気づかないし、たとえ気づいても克服する術すべを知らない。だが、イエスは、その術を私達に示した。

四 個人の根底に働く事実

イエスはイエスに則して見なくてはならないし、パウロはパウロに則して見なくてはならない。これは当然のことなのだが、パウロを含めたペテロ達による原始キリスト教団のイエス理解に基づいてイエスを見る見方がなされている。このことについては少し専門的すぎるので、「みちしるべ」誌では正面からは採り上げないが、必要な限り後で、ご一緒に考えてみたいと思っている。

イエスはご自分の生き方を思想として、論理的且つ体系的にお語りにならなかった。イエスは、自分の全存在をもって、人々との関わりに於いて、神を行じることにより、神の何であるかを直接示し語られた。正に、イエスの全生涯の言動のすべてが神の言葉そのものであった。この態度はとても生き生きとした出来事であつて、体系化された思想や論理をはるかに超えている。

だからこそ、生き生きしたイエスの言動を見つめることによって、そこにイエスその方を見たいと思う。

×
それにしてもイエスがその生涯で示してくださった真の事実とは何であつたのか。わたしたち

は先にそれが「神の支配」と言われていることだと学んだが、これから、イエスの言動に則してその事実の内容に少しずつ目を向けて行こう。

×

×

イエスの言葉や行いに接した者は誰でも、自分の心の深いところに、それが残る。否定しても否定しようがないこととして残る。例えば一目には目を、歯には歯を、と言われている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着をとろうとする者には、上着をも与えなさい。だれかが一里行くように強いるなら、一緒に二里行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」（マタイ福音書五章一二節）

このイエスの言葉を人は非現実的だと思う。このような馬鹿げたことは出来ないと思う。そこまでお人好にどうしてなれるか、と思う。にもかかわらずこの言葉は私達の心の深いところに残る。

イエスは理想主義者ではない。人間の在り方の理想を、私達に説いているのではない。また、単なる道徳主義者でもない。イエスは私たちに道徳を説いているでもない。ましてや、神を信じる者が、そうあらねばならない清い生き方を説いているでもない。

イエスの言葉は、私達の存在の根っこにある自然な定めから出てきて、それを聞く者の内にそ

の定めを覚醒かくせいさせる働きをする。それは、自然な促しなのである。だから、先の言葉ははじめから私達の内にも外にも自然な定めとして在ったものなのである。ところが、私達の自我は、それを非現実的だとか、理想的だとか、お人好なことだとして、馬鹿にしたり、否んだり、笑い飛ばして見向きもしない。

イエスが語られる教えは、決して新しい教えではなく、はじめから私達の内にも外にも在って、私達を支え続けてきた定めから生まれた自然なことからである。

事実、先のイエスの言葉も「真実」である。人間が本当に共存して行く為には、互いが自分のものを無条件に与え合うしかほかに生きようがない。これは理屈ではなく事実なのである。にも拘わらず、このことを、建前だとか理想だとか観念的で非現実的だと言ったり、思ったりする者は、自我の欲に生きるその現場以外に、人間の生きる現実などないのだと思ひ込んでいる観念論者であり、はじめからある定めを自我により故意に曲げようとする利己主義者である。

私達の存在の本当の支えの処では、互いに人が補い合い、与え合う交わりに於いてこそ、人として幸いに生きられる定めが初めから働いて在るのである。このような定めとしての働きの事実を「神の支配」とイエスは言われた。私はこれを「創造に於ける人間の定め」又は「創造に於ける自然」と言ってきたことは先にも述べたとおりである。

×

×

生活している者としての人の在り方には幾つかの側面がある。それを整理してみると次の三つに分けられる。一つには自分個人の在り方である。これを個人性と言おう。二つには他人との付き合いの在り方である。これを対人性と言おう。そして三つには社会の一員としての在り方である。これを共同体性と言おう。そして、私達は、この三つの在り方を自分の人生の課題として自分に背負い、日々苦勞して生きている。

イエスは「苦勞して生きている者はわたしのもとに來なさい。休ませてあげよう」と言われたが、その苦勞して生きているということの内容は、他でもなく、先に掲げた三つの在り方の内にある。まさに、人生とはこの三つの在り方にその現実があるのであって、これを他にして私達の現実はない。とすれば、イエスもこれら三つの在り方を自ら生きるその生き方を通して、人がどのようなことが人らしく生きることであるかを、直接に示されたのである。ここに私達がイエスを聖書に問う理由がある。

わたしたちは既にそれを問うて来たが、以下は、先に示した私達の三つのあり方に就いて、イエスが示されることに注目したいと思う。

イエスは私達の個人の在り方についてどのように示しておられるのだろうか。これについて最も相応しい示しとして一般に採り上げられるのは次のイエスの言葉である。

だから、言っておく、自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の身体のこととて何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物より大切であり、身体は衣服より大切ではないか。空の鳥をよく見なさい、種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。……あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華をきわめたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ。だから、「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と言つて、思ひ悩むな。それは、みな異邦人が説に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要であることをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものはみな、加えてあたえられる。だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自身が思ひ悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。(マタイ福音書六章二五―三四節)

イエスは「思ひ悩むな」と言われる。だが、誰も思ひ悩みをもたないで生きている者はいない。

みんな思い悩みを自分に秘めて生きている。

それにしても、私達が持つ「思い悩み」とは何なのだろうか。それは「自分についての心配と配慮」である。「自分の将来について」「自分の仕事について」「自分の子供について」「自分の老後について」「自分の健康について」……とにかく数えあげればきりがなく多くのことに心を配り、配慮しながら生きている。このような「自分についての心配と配慮」とは、それ自体悪でも善でもない。一見、自分についての心配と配慮とは利己的に見える。同じことでも他人にかかわる事ならば無関心でおれても、其れが自分にかかわる事ならば心配し配慮することを利己的な態度とか、悪または罪などと決めつける者は軽薄な観念的道徳主義者か教条的宗教信仰者である。人はすべて自立すべく成長して行く。自立とは自分のことは自分でする、ということである。それは他でもなく、自分について心配するということである。人が自分について心配することは決して悪ではない。人に心配をかけないように、自分について責任をもって生きていくという生き方は、人として当然なことであるといえるし、たとえ、いろいろな事情で、十分に自立出来ないときにも、なるべく自分が自立したいと思ひ悩み、自分について心配するのは当然である。こうした意味で、私達の人生は「思い悩み」の連続だといえる。自分について思ひ悩むことなくして、どうしてこの人生を生きていくことが出来ようか。しかし、イエスは「思ひ悩むな」と言われる。いったい、イエスはどのような意味で「思ひ悩むな」と言われるのだろうか。

× ×
イエスの言葉は人間存在の深いところから出てくる。よく注意して聞かないと、その示しを看過かんかしてしまい、極めて常識の次元で受け取ってしまう。

さきに掲げたイエスの言葉に注意深く目を向けるとき、イエスは、ただ「思い悩むな」と言っているのではなく、自分の能力や努力だけで、自分のすべてが、自分の思うような方向に生きていけるのだと思うその思いを「思い悩むな」と言われたことが分かる。

だから、「思い悩むな」というイエスの言葉の内には、次のような、私達に対する語りかけが含まれている。

「あなたは、自分についての心配と配慮としての思い悩みが自分を生かしていると思込んでいるがそうではない。あなたは自分の存在について、とても大切な事実を見落としている。あなたが、自分自身について思い悩む以前に既に生かされているという、あなたの生きている事実を見落としている。」

あなた方のうち、だれが思いなやんだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。……今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。(マタイ六・二五)

ここでイエスが示されることは、私達の存在の根源に働く命の営みの事実である。わたしたちは、この命の営みの事実を見落として、自分についてどれほど思い悩んだとて、根本的に自分の生をどうすることも出来ないのである。自分が自分について心配配慮することが、自分を作り出すのではない。人が自分について配慮する以前に、自分より大いなる命、つまり神と称するよりほかなき命の定めのもとに自分として保たれ生かされているのである。このような自分の生きている根源的な事実を、イエスは示された。

イエスはこの事実を「放蕩息子のだとえ」でも示される。父の庇護のもとで働いていた息子が、ある日、将来受けるであろう財産を父から無理に受け取って家を出て行った。そして放蕩に身をもち崩して、無一文になり哀れな姿で、父のもとで働かして貰おうと考え帰って来た。しかし、その息子をいち早く見出して、駆け寄り、すこしも咎めず、しっかと抱き、涙して息子が帰って来たことを喜んだ。この父に接した息子ははじめて自分の愚かに気づいた。彼は自分の努力と配慮だけで自分が生きているのだと思ひ込んでいた。しかし、寝ても覚めても、父は息子のことを思いつづけ案じつづけその配慮のもとにあった自分に気づいた。これは息子にとって新しい自分の発見であった。しかし、それは、本来の自分を発見したにすぎない。人は、本当の自分を知るとき真の安心を得る。聖書は次のように記している。

……『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は家人に命じて言った。『急いで一番良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履き物をはかせてやりなさい。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった。』そして祝宴が始まった。

(ルカ福音書一五章)

私達に対する神の配慮が先ずある。だから私達は存在する。私達に対する神の配慮が先ずある。だから人は生きるし、死ぬことも出来る。神の私達に対する配慮が先ずある。だから私達は喜ぶことも心配し思い悩むことも出来る。この事実生きる自分に目覚めるとき、生きることも死ぬことも神の中、喜ぶことも思い悩むことも神の内の自分であることを知る。神の配慮の手の中に生きる自分には、最早、死ぬは災い、生きるは幸いという構図は消えてなくなる。

×

×

私達が自分を自分の配慮で生かし立たしめ、完成しようとするかぎり、私達の生きる不安は根本的に消え去ることはない。どれほど富を持ち、権力を得、名声を馳せ、善行を積んでも、自分を安心に導くことはできない。それらの上に自分が成るのではなく、それらはみな、神の配慮の

もとに許されて成るものである。この神の配慮の事実ははじめから私達の中に漲っているとイエスは示された。神の恵みの支配は、あすこにある、ここにあるというのではなく、あなたがたの中にある。自分で生きているのではない、大いなる命に生かされているのが自分なのである。それが本当の自分なのである。この自分に気づくとき、すべてが有り難きこととなる。だから、「なによりも先ず、神の国と義とを求めなさい」とイエスは示される。それはとりもなおさず、人が生きている根底に命滾り、今を支え生かしている神の配慮の事実に開眼しなさいということにほかならない。

五 対人関係の根底にある事実

「人間」とはもともと「社会」を意味していたのだということ、青年時代に和辻哲郎氏の書物を通して知ったとき、わたしはとても興奮したのを今でもよく覚えている。それは、人間としての自分の在り方の基本を明確に示されたような気がしたからである。そのとき、わたしが学び、且つ考えたことは次のようなことであつた。「社会」とは人と人の関わりあいだの間、即ち、「人間の」に成り立ち、人はそこでのみ生きる者であるので、人を「人間」と言い、従つて人間は社会的な存在なのであるということ。そして、そのような人と人との間の関わりを豊かに出来る人を「人間性のある人」、つまり「人間性豊かな人」というのだ、と理解出来た。

このことは、先にも言ったように、人間としての私の生き方、在り方に素晴らしい示唆となつた。そして、このような自分の在り方理解は、聖書を通してイエスの言葉に出会うことにより、ますます確実なものとなされてきた。

×

×

人間が社会的な存在である、ということは、人間は人と人との関わりに於いて生きる者であるということだと先に言ったが、それは、私達が好むと好まざるとに関係なく、はじめからそのよ

うな者として在らしめられている事実なのである。このことは、人が、自分は他人との関わりを持つた方がいるいろな事で都合が良いので、関わりを持つとうと打算的に計算して決定したことでなく、私達か他人についてどのように考えようが考えないにしても、それとは一切関係なく、人は初めから他人との関わりに於いて生きるように定められている者なのである。くどいようだがもう一度言うとう、「何故わたしは他人との関わりを持たなければならぬのか」という問い自体は根本的には成り立たないのである。なぜならば、初めから人間はそのような者として在らしめられているからである。このように、人間が関係に於ける存在であるということとは、私達の恣意を超えた「創造に於ける人間の自然」または「創造における定め」なのである。

×

×

私達が、他人との関わりを抜きにして生きていけない者としての定めに置かれ、且つ、そのように、在ることが「自然」であるならば、まさに、人間関係は私達にとって一大事である。だから、人間関係が破壊されるとき人は生きていけないと言っても過言ではない。

たしかに、私達の悩みの多くは人間関係にある。夫婦、親子、嫁姑、友達、職場での同僚、上司、部下、さらには取引先の人々等に於ける人間関係、差別の問題等は日々私達を悩ましている。それだけではない。広く国際関係における政治や経済、民族問題においても、当事者間の人間関係はさまざまな事態を引き起こす原因となる。

では、このような極めて重要な人間関係を結ぶものは何なのであるか。それはほかでもなく、「愛」である。

「愛」とは何であろうか。愛とは関係概念である。それは他のものとの関わりに於いて生まれ、他のものとの関わりに於いて働くものであって、愛というものが何処かに既にあるのではない。したがって、このような愛は言葉で定義出来ないし、しようとすることは愚かなことである。

私達にとって幸福とは、つまるところ人間関係が良好であることだと言えよう。それは他でもなく、人間関係に愛があるということである。

その意味で、イエスがその御生涯を通して人々に何故、愛をお説きになられたかがよく分かる。しかし、イエスは決して愛の理屈を説かれたのではなく、ご自身の行い^(まゝ)を通し、また、日常生活の出来事を語ることによって、愛のなんたるかを提示なされた。このことはイエスの言動を聖書に見る者はだれでも知ることが出来る。

このように考えてくるとき、「あなた方は互いに愛しあいなさい」という聖書の教えは、単に道徳や教訓として人の道を説いているのではなく、人間が人間として生きて行くための根本的な在り方を示している言葉であることに気づく。決して、建前としての教えではない。人間が互いに愛し合わなければ人は存在出来ないのである。なぜなら、人はもともとそのような者として在ら